

# 2005年北海道医療大学歯学部矯正歯 科同門会報告内容

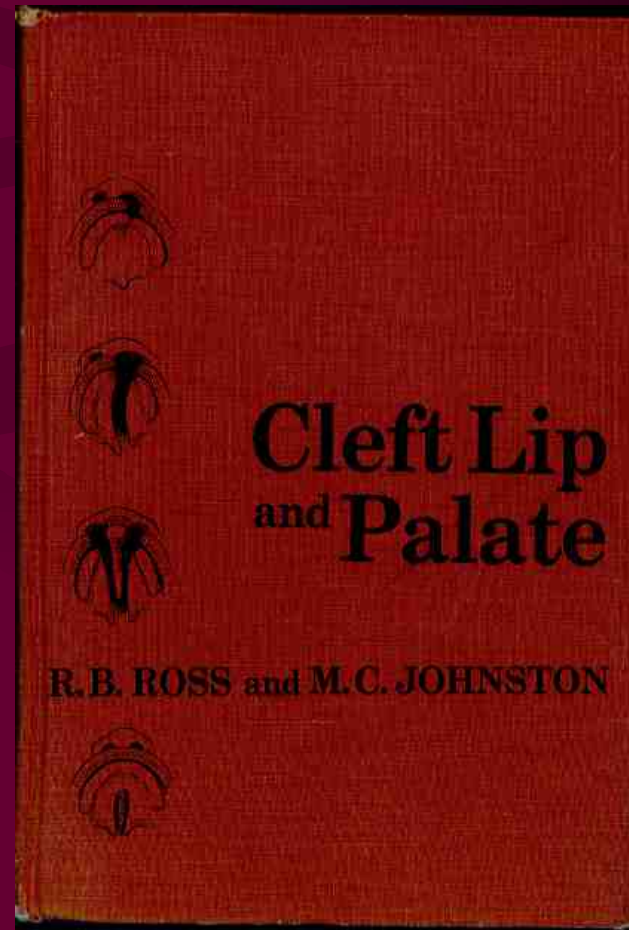
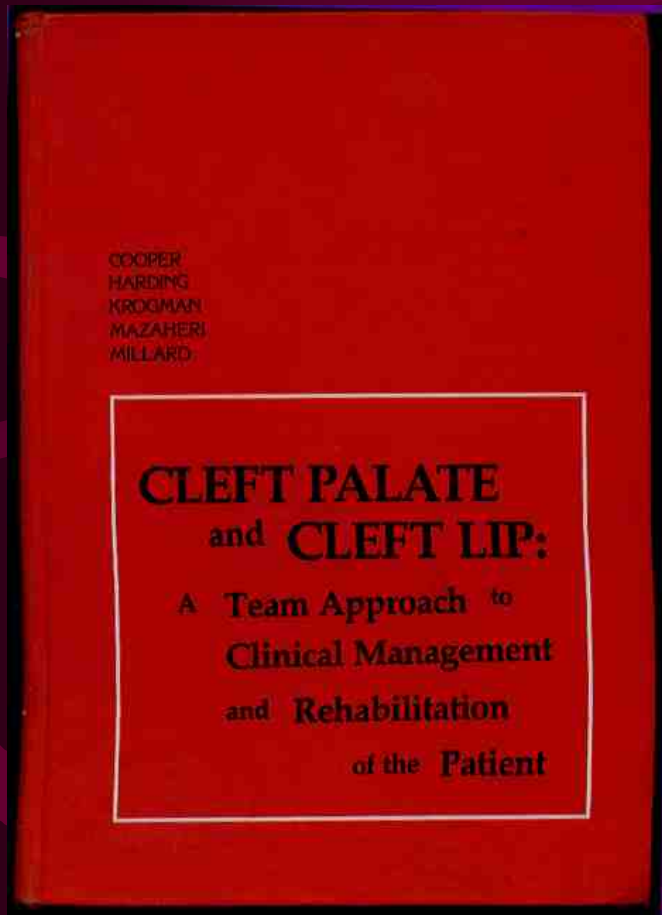
- 1.唇顎口蓋裂への取り組みと履歴
- 2.口蓋裂学会への報告履歴
- 3.口蓋裂児および親の意識について
- 4.口蓋裂言語と発音補助装置
- 5.口蓋裂児の治療法の変遷
- 6.現時点での口蓋裂児の総合的治療段階

# 2005年北海道医療大学歯学部矯正歯 科同門会報告内容

- 1.唇顎口蓋裂への取り組みと履歴
- 2.口蓋裂学会への報告履歴
- 3.口蓋裂児および親の意識について
- 4.口蓋裂言語と発音補助装置
- 5.当院における口蓋裂関係疾患に関する  
臨床統計
- 6.当院での口蓋裂児の治療法の変遷  
症例報告
- 7.現時点での口蓋裂児の総合的治療段階



# 1976年頃輪読



# 唇顎口蓋裂に関する経歴

- 1975.4 口腔外科入局
- 1975 谷間の口蓋裂児たち「この子らに健保を」  
毎日新聞社北海道支局発行
- 1979.2 北海道医療大学歯学部矯正歯科入局
- 1980 カナダ トロント Sick Children hospital  
ランキャスター Cleft Palate Clinic  
シカゴ、イリノイ州立大学顎顔面発達研究所 見学
- 1983.4 市立函館病院歯科
- 1985 口蓋裂疾患の矯正歯科治療が保険適用  
同時に育成更生医療指定医登録
- 1986.4 みはら歯科矯正クリニック開設
- 2003.6 口蓋裂児たち「この子らに健保を」  
毎日新聞北海道支局の許可を得てみはら歯科矯正クリニック再発行

# 日本口蓋裂学会への報告

1978.5パラタルリフトの効果について

1991.7口蓋裂患者の意識調査

1992.7乳歯列時の前方牽引装置の効果

1995.7矯正治療中のパラタルリフト維持方法について

1996.6顎裂部周囲歯牙の経年的形成状態について

(以降 函館中央病院形成外科と交互に報告)

1999.6顎裂部骨移植部への自家歯牙移植の可能性

2001.5顎裂骨移植部自家移植歯牙の移植および

歯科矯正開始時期についての考察

2003.5顎裂骨移植部自家移植歯牙移植の予後調査

2005 発音障害が残存した唇顎口蓋裂患者の

顎形態について(予定)I

V. 要約

口唇・顎・口蓋裂の成因を解明するために臨床遺伝学的ならびに疫学的研究をおこなった。対象はアンケート法により得られた全道の病院の産科，産婦人科医院の42%および母子健康センターの84%において出生した105,462についての資料(資料I)，ならびに札幌医科大学口腔外科を昭和36年11月から昭和42年10月までの6年間に訪れた患者1,031名と，その中からとくに詳細な検討を行なうために選んだ536例(530家系)(資料II)で，この536例は母親が昭和6年以降昭和22年までに出生したものである。対照には530家系の居住地と母の出生年度に近似した200家系を選んだ(資料III)。家系調査に当っては，正確を期するため大部分の症例について戸籍を参照した。

(1) 北海道における最近3年間(昭和40,41,42年)の口唇・顎・口蓋裂患者の出生頻度は0.18%であった。

(2) 本症罹患者の性比は，すべての異常群を含めると，123.6となる。とくに口唇顎口蓋裂では185.8でいちじるしく高く，一方口蓋裂単独では59.9となり，口唇顎裂では118.0で男児が多かった。

(3) 季節と本症の出生頻度との間には一定の関係は認められない。

(4) 本症発現に対する両親の年令，その年令差，出生順位の効果をみるためFisherの逆正弦変換法を行なった上で分散分析を行なった結果，本資料の場合，これら各要因は他の要因の影響を受けることが分り，総括的な結論はえられなかった。

(5) 患者の出生前に受けた1回の人工妊娠中絶の経験は，口唇・顎・口蓋裂の3異常とも対照に比較して高率であった。胎生期，周産期，生後1年以内の死亡については対照との間に有意の差はみられなかった。

(6) 他種先天異常の合併率は16.4%，口蓋裂のみをとるともっとも高頻度(23.1%)であった。主要な合併異常はそけいヘルニア，四肢の異常であった。

(7) 近親婚率は2.8%(いとこ婚率は1.8%)で，一般集団または対照家族のそれに比べてとくに高いとはいえない。

(8) 本症の家族的発現をみたもの13.8%，父親にみられたもの4家系，母親にみられたもの9家系であった。同胞再現率は両親正常の場合，口唇顎裂2.5%，口唇顎口蓋裂3.3%，口蓋裂1.1%で，口唇顎裂および口唇顎口蓋裂の再現率(合計すると3.05%)は，従来の日本人についての報告に比較してやや高く，Fogh Andersen(1942)の報告に近い値を示した。



# 視察經路



1980.4



Dedicated 1962

THE  
H. K. COOPER INSTITUTE  
FOR  
RESEARCH, EDUCATION  
AND REHABILITATION  
DEDICATED 1962

WINTERSTON CLEFT PALATE CLINIC

# Cleft Palate clinic

LANCASTER  
CLEFT PALATE CLINIC  
24 N. LIME ST.

HILKOPER-SEEDINA INTERNATIONAL  
CENTER FOR  
COMMUNICATIVE DISORDERS

HK COOPER INSTITUTE  
RESEARCH EDUCATION REHABILITATION

RESEARCH PROGRAM  
W M KROGMAN PHD  
CRANIO-DENTO-FACIAL DEFORMITIES  
PROGRAM

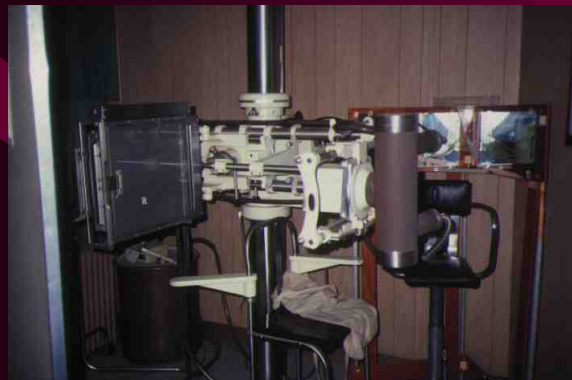
R E LONG JR DMD MS  
S W OKA DDS PHD

GERIATRIC DENTISTRY PROGRAM  
A R PATTERSON DMD

CLINICAL SERVICES  
AUDIOLOGY - G W WEBB MS  
GENETICS - S W OKA DDS PHD  
LABORATORY - V R NEWBORG JR BLT

FIRST FLOOR  
DENTAL LAB  
AUDITORIUM  
SECOND FLOOR  
HEARING TEST

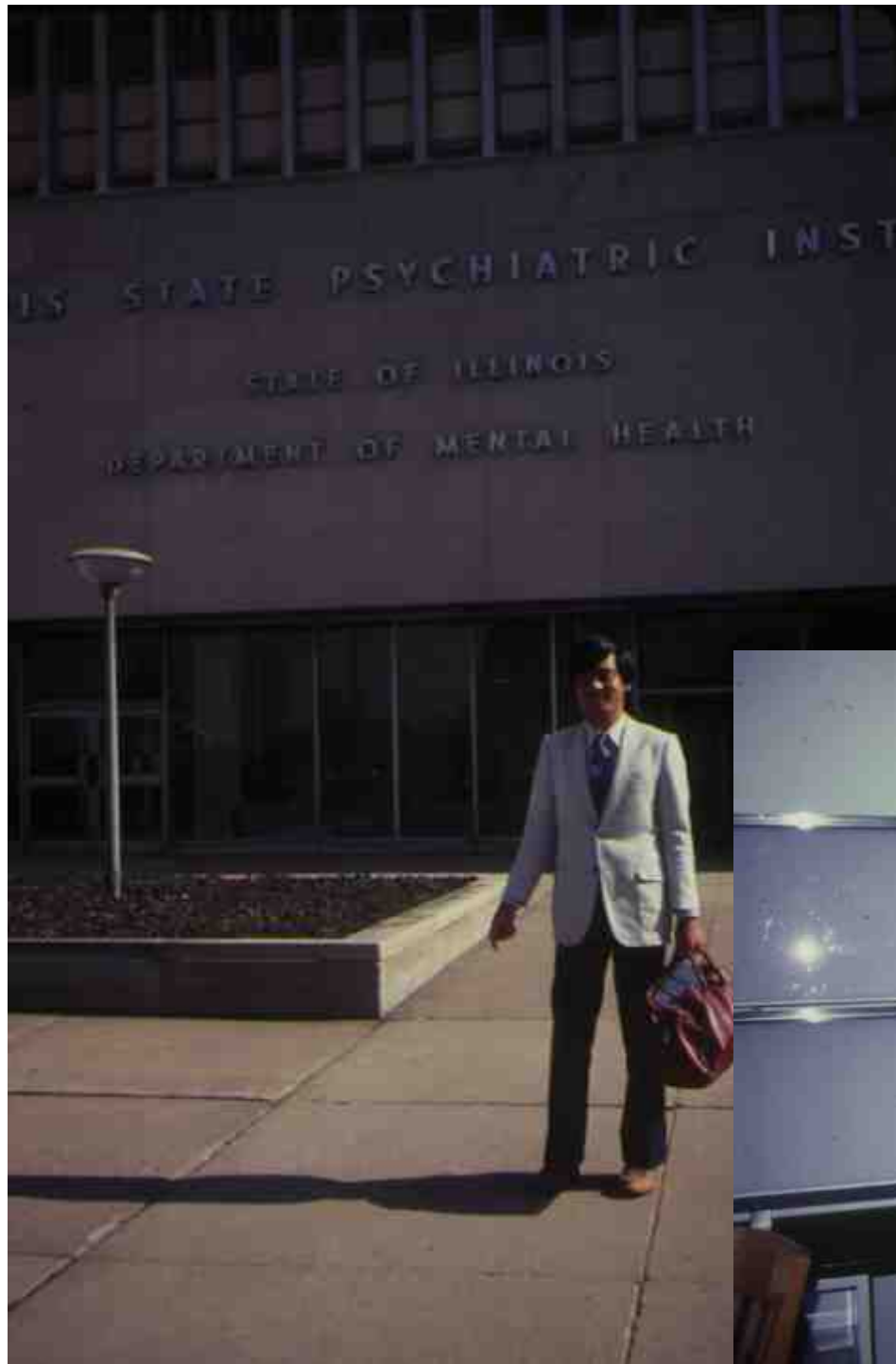
Dr Oka



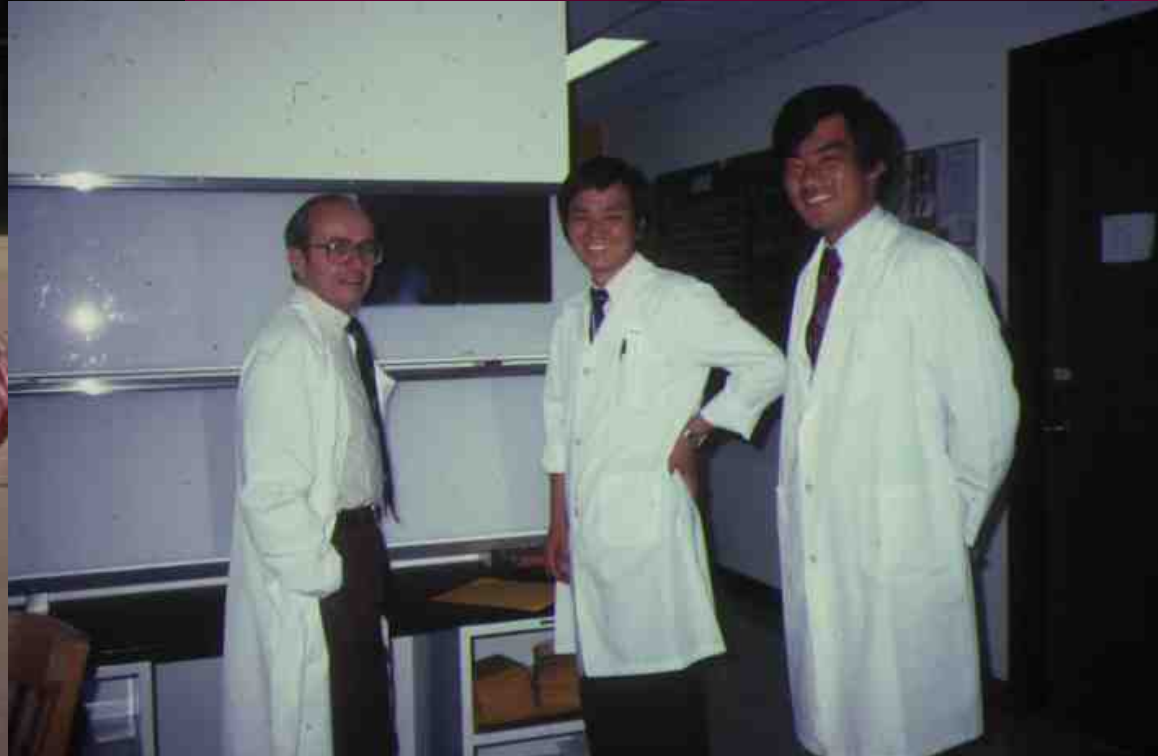


# Sick Children Hosp (Toronto)





# イリノイ州立大学



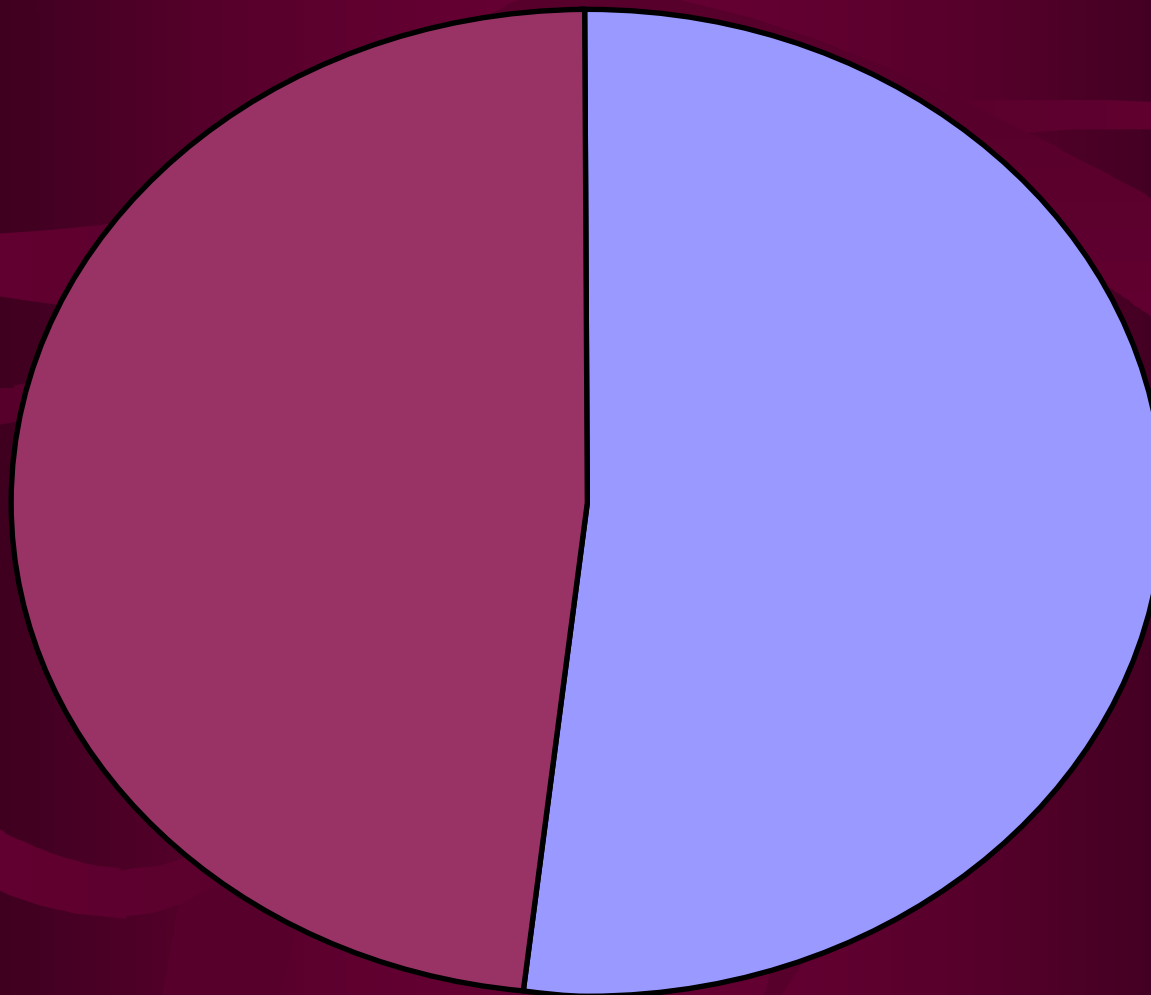


# 当院における唇顎口蓋裂疾患 に関する臨床統計

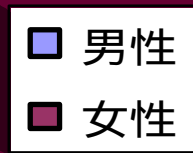
調査期間  
1985/9/3-2004/12/17

性別

女性  
48%



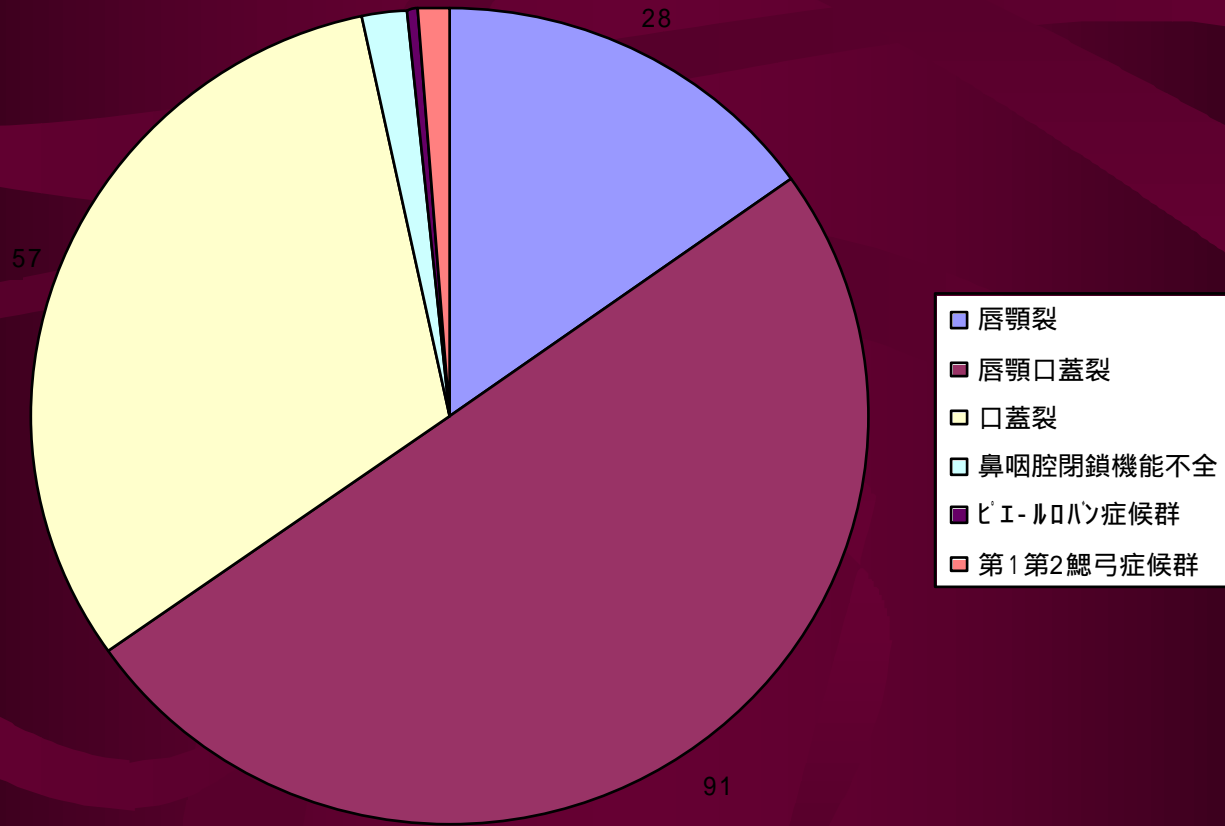
男性  
52%



# 当院における唇顎口蓋裂疾患 に関する臨床統計

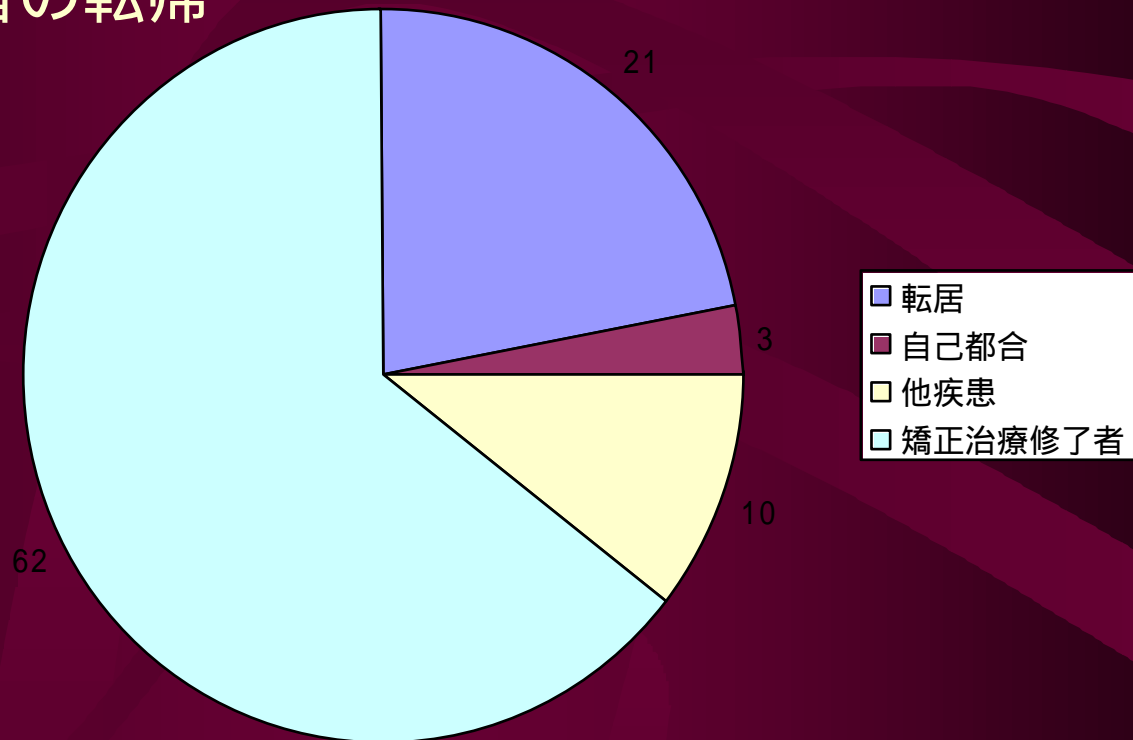
調査期間  
1985/9/3-2004/12/17

## 口蓋裂に関連した系統疾患分類



# 当院における唇顎口蓋裂疾患 に関する臨床統計

## 口蓋裂患者終了者の転帰

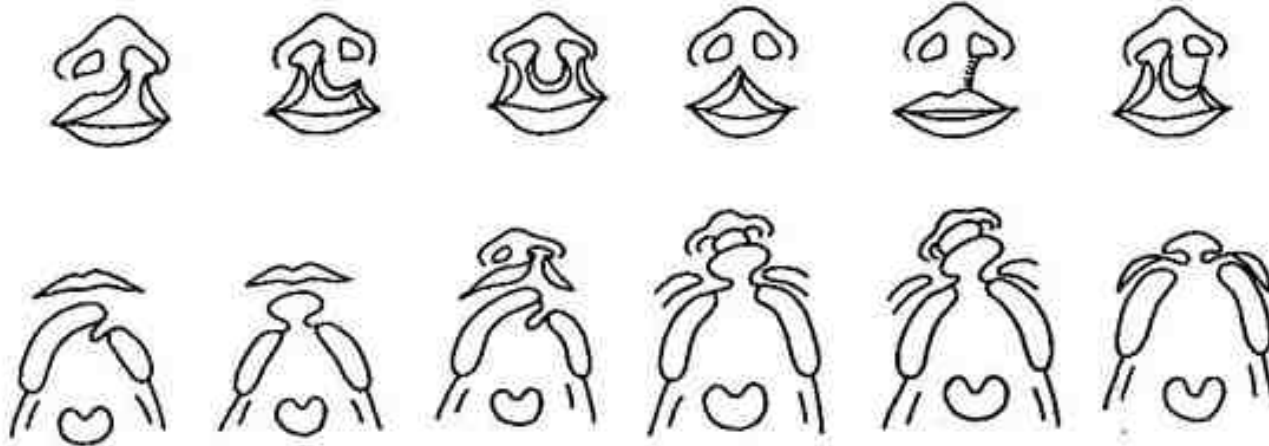


初診年月日	1985/9/3
	2003/4/23
最終年月日	1987/4/2
	2004/12/27

矯正歯科治療終了者平均通院期間 7.693548

# 口唇顎口蓋裂分類

I. cleft of prepalate



II. cleft of palate



III. cleft of prepalate and palate

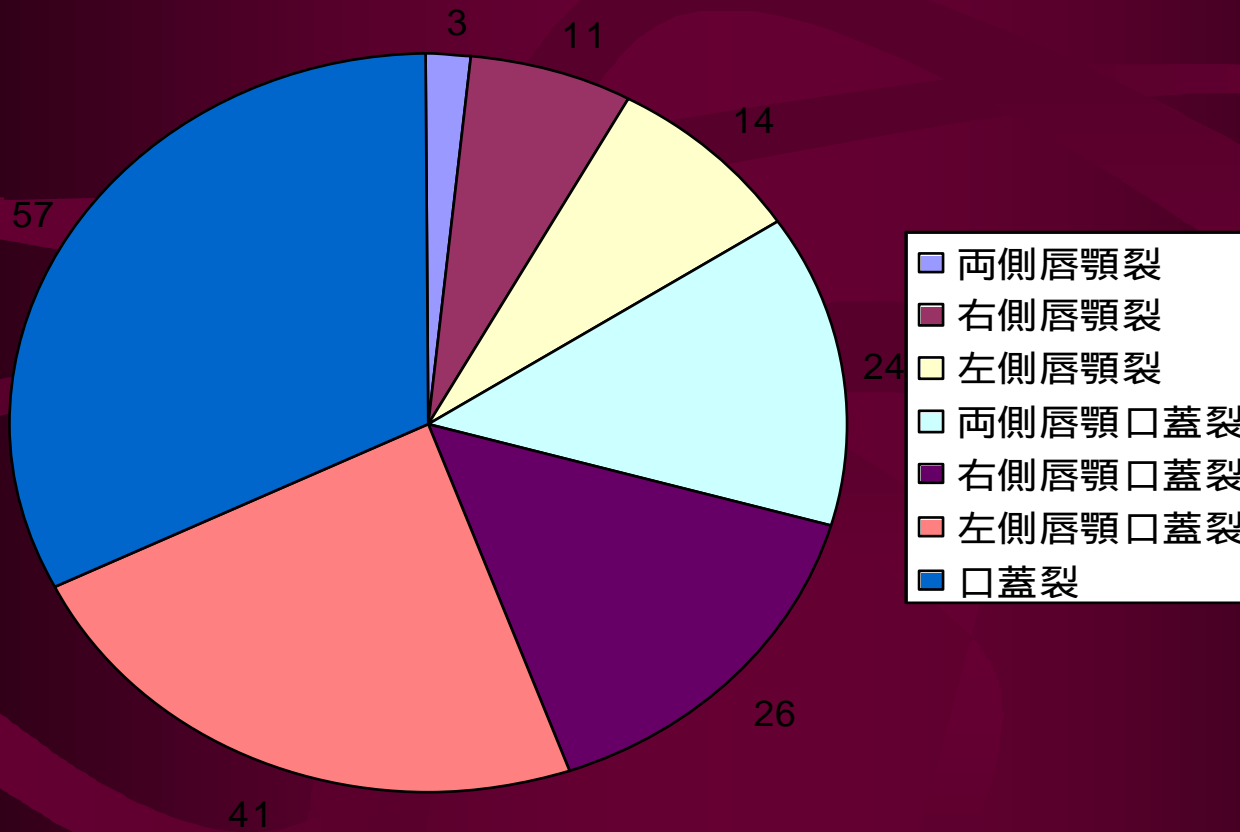


# 当院における唇顎口蓋裂疾患 に関する臨床統計

裂型別分類

調査期間

1985/9/3-2004/12/17



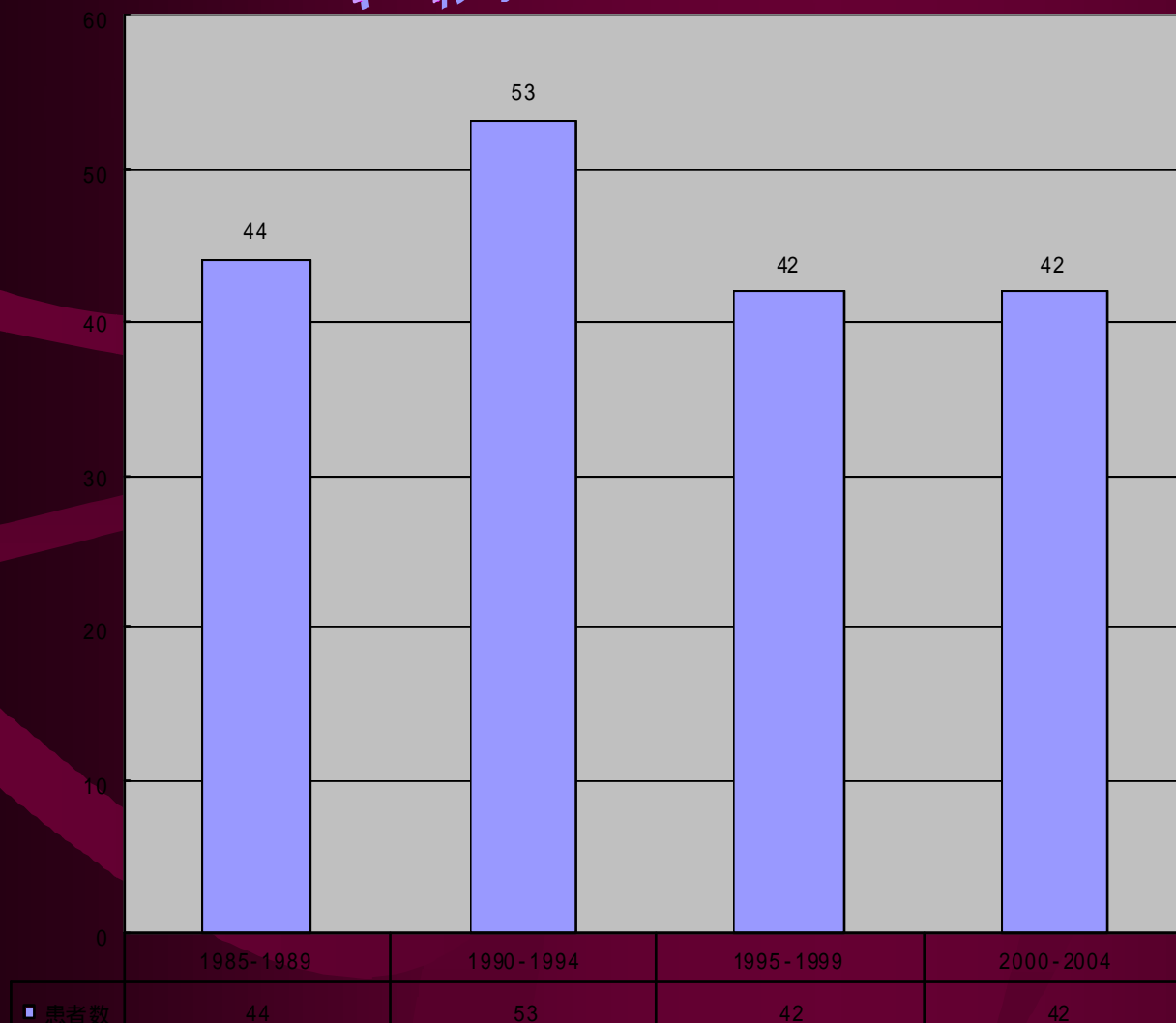


# 当院における唇顎口蓋裂疾患 に関する臨床統計

来院年別

調査期間

1985/9/3-2004/12/17



# 当院における唇顎口蓋裂疾患 に関する臨床統計

来院時年齢別分類

調査期間

1985/9/3-2004/12/17

